
選ぶ世界のその先に

如月しん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

選ぶ世界のその先に

【Nコード】

N8579N

【作者名】

如月しん

【あらすじ】

ある日突然、『勇者召喚』というものに巻き込まれ、常識以前に言葉の通じないファンタジーな世界へと渡ってしまったゼン。この異世界で生きることを決めたはいいけれど、右も左もわからず…。それでも恩返し（？）のために奮闘（？）します！

（基本、ゼンの一人称です。のついたタイトルは別の登場人物視点になります。＊次回投稿は活動報告を参照）

その選択に世界は歓喜するへ1」

その日。

冬の冷たさも、柔らかな日差しに和らいだ午後。

オレは、クラスメイトである深沢^{ふかざわ}結^{ゆい}果^かを探して校内を歩き回っていた。

…が、なかなか見つからない。

（あ……………もう帰ろうかな……………いないし）

諦めて外に出ようとしたところ、逆に校舎内に入ってきた本人をやっと見つけ声をかけた。

「深沢。悪い、これ渡し忘れてた」

そう言っ^てプリントを示しつつ近づいてくるオレに、深沢は一瞬、誰だっ^け?という表情をした。

（一年近くも同じクラスだったんだから顔ぐらいは覚えてて欲しいな）

と、思う。

別にオレの存在感が薄いわけではなく（薄くはないと信じた）、もちろん深沢の記憶力が悪いわけでもない。

挨拶をする程の接点もなく、好き嫌いの感情を覚える程距離が近くなっただけだ。

スポーツ万能で男女問わず人気のある爽やかな性格の深沢と、勉強運動共に平均ぐらいならいいや」とつい思って頑張りの足りない（自覚はある）オレ。

行動範囲と視野が全く重ならなかったオレたちは、良くも悪くもそこに在るだけの…ただのクラスメイトだった。

「ああ、高崎。わざわざ有難う」

顔と、ついでに名前も思いだしたらしい深沢が、女性にしては少し低い声を柔らかな笑みにのせた。

「いや、忘れてたのこっちだし。今日は部活は？」

渡してハイさよなら。というのはどうなんだろう？と思って話題を振ってみる。

別に相手が苦手だとか嫌いだとかいうわけじゃないのだ。ただ話す機会がなかった（もしくは作らなかった）だけで…。

「今から。教室に忘れ物して…取りに帰る途中」

そう言つて、軽く苦笑する深沢。

「なんだ」

似たような行動をしてる深沢に、親近感を覚えてオレも同じ笑みを返す。

ただ、それだけ。

意味のない、ただの世間話。

オレにとつても、たぶん深沢にとつても。

何か特別なことをしたわけではなかったのに……

「「え？」」

そう口にしたのは、二人同時だった。

目の前にあるお互いの姿を見て、次いで自分の姿を確認して。

なぜか周囲の風景に溶けるように霞んでいく身体。見えるはずのない、自分の身体のがっこうが見える事実、二人とも言葉を発することができないまま……ただ茫然とそれを見つめていた。世界が消えるまで。

……いや消えたのはオレたちのほうか。

周りに人がいなかったのは良かったのか悪かったのか……
いたらもっと喚けたのになと、ちよつとだけ思った。

その選択に世界は歓喜するへ1』（後書き）

【登場人物】

タカサキ ゼン
高崎 全

男。16歳。

一応、主人公。

勉強も運動も良くもなく悪くもない平均あたり。

頑張りが足りないという自覚はある。が、特に不都合も無いのでずるずるとそのまま。

フカザワ ユイカ
深沢 結果

女。16歳。

高崎のクラスメイト。

勉強より運動が得意。爽やかで裏表のない性格のためか、女性にとしては低めの声も合わせて男女年齢問わず受けがいい。

その選択に世界は歓喜するへ2」

気がついたら地面に両足ついて立っていた。（いや、今までも立っていたから、その表現はおかしいかもけど…）

とりあえず両手をにぎにぎして感覚を確かめつつ身体の向こうが透けて見えないことを確認する。

（うん。透けてない霞んでない大丈夫。……だけど…）

床を見つめる。

俯いた視界は広くはないが、見える床一面に赤い絨毯のようなものが敷かれてある。

（なんで赤い絨毯??）

「————、————」

突然、話しかけられて慌てて顔を上げる。

（うおーう。金髪碧眼美少女っ!!）

さらさらの手触りの良さそうな長い髪、布をたっぷりと使った白い服。可憐さの中に凜とした気配を同居させた少女がそこにいた。

（どっかのお嬢様か?なんか後ろに取り巻きとボディーガードっぽい人がいるし…）

その全員が、美少女と同じような外見と服装をしていた。

しかも華美ではないが、装飾品をいくつか身につけている。

（変わった趣味だな。コスプレなのか？なんとなくだけど高そうだな。特に装飾品）

「えっと…誰…ですか？」

失礼にも初対面の人たちを品定めしているオレの横で、深沢は明らかに日本人ではない彼らに戸惑い一つも話しかける。

「……、……。……？」

（民族衣装なのか？ていうかあの髪と服、長すぎだよな。絶対引きずるよ。汚れるのとか気にしないのかな？）

相手の言葉がわからないのをいいことに、品定めを続行するオレ。深沢も言葉がわからないらしく、オレに戸惑ったまま視線を送ってくる。

わかる？

視線のみで話しかけてくる深沢に、わからないという意味を込めて肩をすくめてみせる。

オレたちのジェスチャーの意味を間違いなく美少女たちも理解したようだったが、そもそも最初から言葉が通じないことがわかっていたのか、お構いなしに話しかけてくる。

「……。……、……」

それはさておき。

どうあっても理解できそうもない言葉を聞き流しつつ、たった今気づいてしまったものを見なかったことにするべきかオレは悩む。

（あゝ……オレってば視力がいいのって割と自慢だったりするんだけど……）

視線は窓の外。

踏み締める赤い絨毯も、年期の入った石造りの室内も、緻密な意匠を施された窓枠にもツツコミたい気分なのだが、それより……

（島が浮いてる……）

窓からはまだ高い位置にある太陽と青い空が見えている。大地は見えない。

遠目にだが、その空に浮いた島には豊かな緑があるように見え、そこから落ちる水（川？）が太陽の光を反射して幻想的に煌めいていた。もしかしたら自分の今いるこの場所は高い所にあるのかもしれない、と思う。

自分は校舎の一階にいたはずだ、とか、時間帯は夕方に近かったはず、とか、そもそも島は浮かないだろ、とかはきつと気にしてはいけないんだろう。

（うん、きっとそうだ。自分は夢を見てるんだ。もしくはリアルなアトラクションにいつの間にか連れて来られたんだ。もしかしたら異世界かもなんて、まかり間違ってもそんな期待をしたらダメなんだ！）

わけのわからないことを考えながらもかなり期待しつつ、外見は平

静を保つ。

だってもしかしたらコレはかの有名な勇者召喚イベントかもしれないんだ。もしかしたらもしかして勇者になれるかもしれないのだ。へ々な態度は避けたほうが無難だろう。

（きつと勇者だったらいついかなる時でも取り乱したりはしないんだろう。貴方は勇者ですだから魔王を倒してきてください、とか言われても大丈夫なように心の準備をしておこう。うんうん。）

見知らぬ場所「異世界」勇者召喚。などと、妄想とも言う思い込みを発揮し、小説の中の主人公になった気分で興奮していると、

「えつと……、――――？」

深沢がいきなりわからなかったはずの言語で話しはじめた。

（……………いやわかってたけどさ。どう考えたって勇者は深沢のほうだって。……………そうなると自分は魔王か？……………いやだからわかってるよ？器じゃないって。……………せめて勇者の従者とかのポジションに付けないかな）

深沢は言葉を理解したらしいが自分はまったく何を言っているのか理解できないので（深沢はオレとは頭の出来が違うらしい）、美少女たちと深沢が話している間のヒマつぶしにどうでもいいことを考えてみる。

異世界だとか勇者だとかはオレの願望だ。最近そういった内容の小説を読んでいたら自分に当てはめて、だったらいいなと妄想してみただけだ。

だって本当にヒマなんだよ。……っか、ココどこだよ？

見たかんじ、RPGとかでよくあるようなファンタジーっぽい所。

中世ヨーロッパ風？

どこのアトラクションだよ。

言葉がわからないから会話に混ざれないし。一体何がどうなってるのか聞こうにも、深沢は美少女たちとの会話で忙しそうだし。

「高崎。言葉……わかる？」

「（ん？何、やっと通訳してくれる気になったのか？）いや。全然。まったく」

わかりません。と、言葉と態度で示す。

ここで見栄張ってわかるとか言ったらバカすぎるだろう。もちろん（）の部分は口に出してないぞ？

「……あゝ……うん……、なんていうか……。彼女たちが言うには、ここは……えっと……異世界……らしい」

（…………マジで？）

マジですか？マジなんですか？…………マジなんでしょうね。

「（とりあえず頷いておこう）……へへえ」

「それで、えーと……。」

めずらしく（と言えるほど親しくはないけど……）深沢は言葉に詰まりつつ説明してくれる。

簡単に言う……

ここは異世界であり、召喚という儀式でもって勇者を呼び、その勇者が深沢で、元の世界に帰るためには魔王を倒さなければいけない（魔王のポジションは埋まってた）らしい…
いわゆる、異世界トリップの王道パターンのようなだ。

そしてこれが一番大事なこと。

オレのことについて、……どうやらオレってば単に召喚に巻き込まれただけ…のようだ……（金髪美少女はじめ皆が同情した顔をしていた）

……ああそうかもなって思ってたけどさ。

思ってたけどさっ

そんなに皆して可哀相な人を見るかのような目しなくてもよくない？
傷痕に塩塗りたくってるって自覚はもちろんあるんだろうな？

………ちくしょー。。。。

せめて従者のポジション用意してください！

その選択に世界は歓喜するへ3」

くさつても仕方ないので、駄目モトで行動に移してみる。

「せめて従者ポジションを！」

魔王討伐なんて（たぶん勇者一人でやれる）そんな素敵イベントを見逃すわけにはいかない！ぜったいに特等席で見るのだっ！

「勇者なら足手まといの一人くらい余裕だろ？連れてけ」

なんだか偉そうなセリフになってしまったが、それを律儀に美少女へ通訳してくれたらしい深沢に、自分の心の狭さを思い知らされたような気がしてなんだか悔しい。

だってあつちは勇者でこっちはただの巻き込まれ。

つまり招かれざる客ってことだろ？

八つ当たりしたくなっても仕方ねーよな？

……っか、誰にイイワケしてんのオレ。

「高崎。まずは部屋を移動しましょう、だつて」

……いや、そんなキツチリ通訳してくれなくてもいいんだけど……深沢
沢ってほんと律儀だったんだな……

先程の部屋から階段を下り通路を歩いた先はかなり広めの部屋（もちろんすべて石造り）があった。

「————」

美少女が何かを言って深沢に棒のような細長いものを手渡す。

それを深沢は躊躇うことなく引き抜いた。

……どうやらあれは剣だったらしい。

剣ってもっと大きくてゴテゴテした装飾がされてるもんだとばかり思ってた。

（…っ！か、剣って。ホントにファンタジーだな。このぶんだと魔法もあるのか？）

期待でわくわくするな

やっぱ一度は使ってみたいよな？魔法っ！

ガキイイインッ！！

いきなりの轟音にびびるオレ。

何事かと思っで見れば、深沢が美少女の護衛（？）の男の人と剣の打ち合いをしていた。

そしてあっさり圧勝してしまう深沢。

（……………うわ…お約束なチート…羨ましすぎるっ）

汗もかかない清々しさで、戻ってきた深沢はオレに剣の柄を向ける。

受け取れってことだよな？と思ったオレは素直に剣を握る。と同時に剣を離した深沢。

「うおわっ！」

あまりの重さに剣を落としてしまった。いやまだ一応柄は握ってはいるが。

こんなに剣が重いとは思わなかった。だって深沢は普通に持っていたのだ。片手で。

（そうだった…深沢は勇者なチートだった……ん？いや待てよ？）

違和感があったので記憶を巻き戻す。

………そういえば深沢に剣を渡したのは美少女だった。片手ではなかったが、それほど重そうなかんじではなかった。

（と、いうことは？）

深沢（女）

金髪美少女（か弱そう）

………オレ？（最弱！？）

（いやいや待てオレ。そこは認めたら男の尊厳がなんとかかんとかだぞっ）

再度、剣を握る。

今度は力を入れて持ち上げてみる。

（う、腕がぶるぶるする…マジ重っ）

言われなくてもわかる。

今の自分の格好は大変に情けないものであると。

だから……

「ごめん。高崎」

だから。

（横からさらりと奪ってくんじゃねーよっ！

いやこんなクソ重いだけの剣なんて落としてやるうかと考えてたとこだったけどさ！）

……どうやら認めざるをえないようだ。

そう、

（オレは前衛には向かない！！）

ならば後方支援。つまり、魔法だ。

「あるんだろ？魔法」

どういつ理論展開だ、とか言われそうだが気にしない。

オレの言葉を深沢に通訳してもらった美少女は、なにやら小さな宝石箱のようなものを持ち出してきた。

コッテコッテに装飾された蓋を開けると、中には鏡のような反射板が埋め込まれていた。

その上に深沢が手を翳すと、視界すべてを覆い隠すようなまばゆい光が溢れる。

数瞬のことだったけれど、目に光が焼き付いて痛い。

「高崎も」

深沢に促され、オレも同じように反射板に手を翳す。

深沢と違い、一瞬だけ弱々しい光がほんの少しだけ立ち上る。

先程の深沢の光の残滓のせいで、見間違いじゃないかと思えるくらいの脆弱な光だった。

おそらく、一連の流れからして今やったのは魔力測定ではないかと思われる。

(……………深沢、どんだけチートだよ……………)

自分と深沢との力の差に呆れながら回りを見回すと、やはりというか……………とつてもとつても同情したふうな視線をみなさん送ってきていた。

美少女なんか、この世の終わりというぐらいの悲しげな表情をしている。

(え？あれ？深沢がすごいだけじゃないの？……………逆？オレがだめだめなの？)

……………ここでも認めなければいけないらしい。
オレに魔法の才能はないのだと。

マージーかーよー

最弱決定？足手まとい決定っすか？？

はぁ…頭くらくらしてきたな

魔王退治…連れてってもらえるかな………

その選択に世界は歓喜するへ4

勇者の従者にすらなれないと判明してしまったオレは、その後のこの世界についての説明を屍のようになって右から左に聞き流していた。

言葉がわからないから、聞いても意味はなかったし。

でも言葉を理解しようと努力はすべきだったかな、とちょっとだけ思った。

反省。…ちよつとだけな。

「で？結局なにがどうなわけ？」

目の前のテーブルにはたくさんの種類の料理が並んでいた。時刻はすでに夕食時。

オレはこの時まで屍と化していたわけだが…

言い訳をさせてもらいたい。

召喚されたとき、こちらの時刻は昼だった。あちらの世界ではすでに夕方だったのに。

本来ならもつと早い時間に食事をしていたはずなのだ。

…つまり何が言いたいかというと。

（腹がへった！！）

単に空腹で動けなかったのだ。そういうことにしておいてほしい。魔法が使えなかったからといって、へこんで泣いてたわけじゃないのだ。けっして。

「ん…、この世界は魔王によって危機に晒されている、というのは話したよね？」

「おう。で、その魔王を深沢が倒しに行くんだろ？明日行くのか？日帰り？」

話しながら食べるのは行儀が悪いかもしれないが、腹へったし。

（遠慮せずにいただきます）

会話の途中で食事を始めたオレを苦笑しつつ眺め、深沢も食事を始める。

はむはむはむっ……………はむはむ……………はむ……………

（……………あ……………何て言えばいいのか……………
……………味がしねえ……………）

美味しそうな見た目とのギャップのある味（無味だけど）に、オレの口の動きが一瞬止まる。

ちらりと深沢を見れば、普通に美味しそうに食べていた。

招かれざる客でありながら、勇者と同等のもてなしをされている。

それなのに、口に合いませんとか我が儘は言えないだろう。表面上は深沢も文句はないようだし…

オレは事なかれ主義者なのだ。ここは無難に『黙る』を選択しよう。

「魔王討伐はまだ先の話だよ。一緒に行く人たちを選ばなきゃいけないらしい」

「そうなんだ？」

意外とゆっくりなんだな、と思う。元の世界に戻るのはまだ当分先の話ってことのようにだ。

「この世界には三つの国があって、その三つの国の先に魔族と呼ばれる人達の住む地があるんだって。そこに魔王はいるみたい。…ここからはずいぶんと遠いみたいだから日帰りは難しいと思う」

苦笑しながら深沢は簡単に説明してくれる。

全部の質問に答えようとすると何か、やっぱり律儀な性格してるよな。

律儀といえば、魔王も律儀なんだな。魔族の地？にいる、ということとは、そこに留まっついていて他の国には行っついてないってことだろ？なら別に、世界的な未曾有の危機！？…ってわけじゃなさそうだけど……

なんで魔王討伐とかいう話になってるんだろう？

「それより。この世界の人達の寿命は魔力量で決まるんだって。なんとも不思議で理解できないんだけど」

オレの疑問に思った事をあっさりスルーし、深沢は話題を変える。勇者には心を読むという能力はないらしい。

「なんだよ、ソレ？魔力がいっぱいあると長生きするってことか？」

「みたい」

なんだかちょっと引く掛かるが…

「ええ……。つてことは、魔力あんまりなかったオレは長生きできないってこと？」

「んー、魔力は増やすことが出来るらしいから、そうでもないんじゃないかな」

「ほうほう。……増やすって、どうやって？」

「なんだか質問ばかりで恥ずかしいな。異世界だし言葉通じないし仕方ないのかもだけど……」

「睡眠や食事で増やせるって言ってた」

ウザがらずに答えてくれる深沢には感謝だな。

オレが深沢の立場だったら無視か睨むかどっちかな。絶対。

（オレってば、ちっさい人間だねー）

ちよつとぐらい深沢を見習ったほうがいいかもしれない。

……まあ、それは後でもいいか。

それより今は、魔力増量のためにたくさん食べることにしよう。味しないけど。

魔力が増えれば、もしかしたら従者ポジションもらえるかもしれないし。

…力がなくても魔王討伐には連れてってもらえるかもしれないけど、何もしないで守られてるだけってのは、男として以前に人としてどうかと思うしな。

で、張りきって食べた結果。

「……うう……っ……食べすぎた……」

「高崎って極端な性格してるんだ？」

呆れた顔した深沢に、疑問形で断定された。

「……自分でもやりすぎたな」とは思うから否定できない。
あほだろオレ……。

マジで食べすぎて動くのも難しかったオレは、深沢と給仕をしてく
れていた人（女性）数名に部屋まで運ばれてしまった。

「………情けなさすぎるぜオレ。」

泣いてもいいだろうか………

その選択に世界は歓喜するへ5

客室らしきところに連れてこられ、しばらくベッドに横になっていたが、ちつとも良くなった気がしないので、とりあえず部屋の中を歩き回って消化を促してみる。

(うー……苦しい……)

かなり広いがどうやら一人部屋らしい。

おかげで誰かに見られるということはない。

隠れて監視とかは……してないと思いたい。

だって、腹押さえて前屈みで部屋を徘徊するヤツってどう見たって変質者だよな……

…うわゝ自分で言っててへこんできた…

ていうか……だんだん気分が悪くなってる気がするんだけど……

お食事の皆さんゴメンなさい。吐いてきてもいいですか…？

「ふう。ちょっとだけすつきり」

前屈みの状態から脱したオレは、やっと意識を外側に向けられるようになった。

部屋には明かりがついてなかったが、窓から入る月の光で仄かに明るいことに今更気づいた。

大きめに造られた窓に寄り、夜空を見上げる。

「…おお」

そこには見慣れたものよりも大きな月があった。

「どおりで明るいはずだな」

包み込むような柔らかな光の幻想的ともいえる景色に、感嘆のため息をつく。

「…はあ…」

ふいに、目からも何か出そうになったが、そこは耐える。

「吐いちゃったし、魔力増量はしてないよな？」
寝ればちよつとは増えるか…？」

魔力の量によって寿命の長さが決まる。

どういう原理なのかはわからないけれど、それは健康状態にも影響があるんじゃないだろうか。

ずっと気にしないようにしてきたけど、この世界に来てから少しずつ体調が悪くなってきた。

「つーか、どういう仕組みで増えてるんだ？睡眠や食事って、イメージからすると増量より回復な気がするけど……」

自分は魔力の量が少ない。

金髪美少女や他の見知らぬ人たちすべてから同情される程に。

その意味を考えると怖い結論が出そうで、わざとズレたことを声に出して言ってみる。

「それは体力の話か……。……うん……。体力と魔力の違いがわかんなくなってきた。明日聞いてみるかな？ 深沢わかるかな……？」

もし、このまま魔力が増えなかったら……

「言葉がわかれば他の人に聞けるんだけど……。わかんないんだし……。仕方ないか……。ないよな……。……」

言葉って大事だなと、ここにきてやっと思い知る。

だいたいのはジエスチャーでも伝わるけれど、気持ちを伝えるにはそれだけじゃ足りない。

「……。よし。とりあえず、寝るか！」

考えたって解決策が出るわけじゃない。

（もしかしたら、明日になったら解決策があっさり見つかるかもしれないし？）

我ながら楽観的な考えだな。とは思っけど……

せっかくの異世界ライフだし楽しまないとな！

そうと決まれば、
おやすみなさいっ

その選択に世界は歓喜するへ6

気がついたら何だかよくわからない場所にいた。

確かに自分はベッドに寝たはずなのに、ベッドは見当たらないし何故か立っているし…

ベッドどころか、月明かりで確認した家具や、そもそも部屋すらもなかった。

モヤがかかっているのか…視界を遮るものはないはずなのに、辺り一面確かな形として捉えられるものは何一つなかった。

自分が立っている場所も床なのかはつきりしない。

自分では立っているつもりなのだが、踏み締めている感触がない。浮遊感もないので浮いているわけでもなさそう。

「?????」

頭の中が？マークでいっぱいになる。

「はじめまして。ゼン」

いつの間にか目の前にいた人物が声をかけてくる。

そんなに遠くにいるわけじゃないのに、どうしてもその人物の顔がわからない。

見えてるはずなのに。

(…なんだろう…このあやふやな感じ…まるで夢の中にいるみたい
な…)

…なんだ、そうか。これって夢なのか。と気づいたオレは挨拶を返
す。

「はじめまして。…えーっと…?」

残念なことに相手の名前がわからない。夢の中なんだからわかって
てもいいはずなのに…

「夢の中ではないよ。ここはキミの深層心裡。…まあ同じようなも
のかもしれないけど」

顔は相変わらずわからないのに、相手が微笑ったことがわかる。

「現実世界では僕はキミに声を届けることが出来ないから、キミの
精神にこうして繋げさせてもらった。本来ならこの接触もあつては
ならないものなのだけど…非常事態のため、仕方ないと判断させて
もらったんだ」

んだ。と、言われても…

何が何やらわからないんだけど?

「キミにとっては夢でしかないかもしれない。けれど、これは現実
のものとして考えて欲しい。僕が今から説明することは紛れも無い
事実なのだと理解して欲しい」

「……………わかった」

何を言われるのかよくわからなかったが、相手が真剣なのだという
ことはわかった。

「結果から言うよ。ゼン、もうすぐキミは死ぬ」

………は？

何て言った今。いやいや怖いこと言うね初対面なのに。

「気づいているんだろう？自分がこの世界で長くは生きていけない
かもしれないこと」

は？フツー気づかないだろ？そんな事。っーか、思わないって。

ただオレは、身体の調子がおかしいなって思ってただけで…

確かに寝る前は変なこと考えそうになったけど、具合が悪いときつ
て誰でもネガティブ思考になるだろ？

「ゼン。この世界は理によって、魔力の量が寿命の長さ決められ
ている。

けれど…キミは体がこの世界に適應できていないために、世界から
供給される魔力を吸収し自分の物とすることが出来ないでいる。

…持っている魔力が少ないキミではそう長く生きられないんだ」

なんだろう…すごく怖いこと言われちゃってる気がするんですけど。
それを理解しろと？

「………なんで？」

ああ情けない。もっと大きな声出せよ。怒鳴れよ。喚けよ。それが
本当に真実なのかと問い質せよ。

でも知ってる。ずっとこの世界はオレによそよそしかったこと。
まるでフルスクリーン映画を観ているように…自分の回りに透明な壁があるかのよう。

……ずっとこの世界は遠かった。

「…帰れるんだろ？」

オレはこの世界に歓迎されていないって、ずっと気づかないふりをした。だっていつかは帰るんだ。だったら今いるこの世界はオレにとっては夢でしかなくて、この世界に馴染めないことなんて当たり前だと思ってた。

「勇者召喚は最初から最後まで決められているんだ。異世界の住人を喚び必要な力を与え役割が済めば元の時間と場所に還す。これは理として定められ、誰にも介入することは出来ない。…キミが巻き込まれたのは不運だとしか言えない…」

………それってつまり？

「帰れないって…何か？」

「来るときに近くにいて巻き込まれたのなら、帰るときも近くにいればあるいは。…けれど、キミは多分その時まで生きることが出来ない」

とても辛そうに、目の前の人物が言う。
身内や親しい友人に告げるかのよう。
その、最終宣告を。

ぐちゃぐちゃになってたオレの心は、それだけでスツと風いだ。

「…そっか……」

不思議な感覚。絶対に今が初対面なのに、オレとは全然無関係の人のはずなのに、それなのに、オレのことを想ってくれている。オレの心を気遣ってくれている。

それがなんだか嬉しくて、もういいや、という気分になった。

死ぬのはイヤだけど（しかも異世界で）、でも人生の最後に、こうやって真剣にオレを気遣ってくれる人に出逢えたっていうのは、すごく幸せなこともしれない。

「そっか」。うん、わかった。教えてくれて有り難う」

「…ゼン」

目の前の人物が泣きそうな気配がしてオレは慌てる。

「いやっ…だつてさ！……だつて…誰のせいでもないだろ？仕方ないっていうかさ……まあ落ち着いた気分になれただけマシかな」と思うし」

へらつと、相手に笑ってみせる。緊張感ないなって我ながら思うけど。

だって本当にいいやつて思ったし、嬉しかったし、なんだか気分いいし。

「ゼン……。もし、キミさえよければ、この世界で生きる…という選択もできる」

「……は？」

「いや、だから、キミさえ望めばこの世界で生きていくことも出来…「早く言えよそういうこと！」「…えっ…？…？…すまない」

死ぬ覚悟決めたところだったのに！こいつ、突き落としてから引き上げるタイプだったのかっ

「キミがこの世界の住人になることを受け入れれば、世界もキミを受け入れる。当然魔力も受け入れることが出来るようになるから、この世界で生きていける。けれど…キミのいた世界でキミの生きた証は消滅する。誰の記憶にも痕跡は残らず、最初からなかったものとされる。それでも…」

相手の戸惑いの感情が伝わってくる。

こちらの世界を選んで欲しい。けれど選んでくれなかったらどうしよう。

そんなふうに思ってる。

目の前にいる人物は、間違いなくオレに生きててほしいと思ってる。

（うわヤバイ。めっちゃくちゃ嬉しい）

生きること、幸せであることを、願ってくれる人がいる。それが、顔がニヤけるほどに嬉しい。

だから。

「オレはこの世界を選ぶ」

オレの言葉に、相手は驚いたようだ。

しばらく固まった後、とても嬉しそうに笑う。（見えないからそういう気がするだけだ）

「有り難う、ゼン」

…その台詞はオレのほうだと思っけど？

まあいいか。嬉しそうだし。オレも嬉しいし。

とか思ってたら、急に意識が遠くなる。

それでも、声は耳に届く。

「ゼン。世界はキミを歓迎するよ。加護と祝福を送ろう。キミの道行に幸降るように」

その言葉と同時に、体が暖かな気配に包まれたような気がした。

あ、名前…聞きそびれたな

その選択に世界は歓喜するへ7

ふっ、と意識が浮上する。

目を開けるとそこは自分に与えられた部屋だった。

夢……………

「……………じゃないっ！」

ガバツと勢いつけて起き上がる。

寝る前まで感じていた倦怠感がなくなっている。

起き上がった勢いのまま、窓に駆け寄り、鍵を開けるのももどかく開け放つ。

ふわり、と朝の空気が頬を撫でる。

昨日までよそよそしかった世界が、とても近くに感じた。

柔らかな朝の光も、鳥たちの鳴き声も、葉を揺らす風も、見えるものすべてが輝いているかのように。

「キレーだな……」

昨日までは、ただ観賞物として美しいとしか思えなかった景色が、今は感動と共に胸に染み込む。

「オレは今ものすつごく感動しているっ！みんな有り難うっ！今日からよろしく……」

あまりに気分が良かったので、バカみたいに叫びたくなった。

まだ早朝っぽいし聞いている人なんていないよな？

……いたら恥ずかしい。

誰かに向かつてならまだしも、一人で叫ぶとか怪し過ぎる。何して
たんだとか聞かれたら何て答えよう？

素直に世界に感謝を捧げてましたって言うか？

(……怪しさ満点だな。やっぱ止めよう。)

ていうかオレ言葉わかんねーじゃん。

「……いややっぱり止めよう。深沢が聞いて……」

独り言をぶつぶつ呟いていたら、外から何やら音が……

「……ぶわわっ!？」

何かに突進された。……どうやら鳥のようだ。

「な……つんで……こんなにいっぱい……ぶっ……ちよっ……待つ……」

わけがわからないが……何故かかなりの数の鳥たちが纏わり付いてく
る。

もしかしたら餌をくれる人と間違えたのかもしれない。

「餌なんて持ってねーよっ……って聞けお前らーっ!」

なおも纏わり付いてくる鳥たちを空に帰そうとするが、まったく聞
いてもらえない。

そんなこんなで怒鳴っていると、扉をノックする音が聞こえた。
次いで少し慌てた様子の声がする。

…すみません。言葉がわかりません。

相手のほうもそれに気づいたのか、こちらの応答を待たずに扉が開かれる。

そして中の様子…というよりオレの様子に気づき慌てて近づいてくる。

それを見た？のか鳥たちは一斉に飛び立っていった。

（うう…っ、朝っぱらから疲れた……せっかくのこの世界デビューの初日だったのに…）

「……………」

長い金髪を二つに分け、きつちり三編みにしたメイドさん（たぶん）に覗き込まれて、オレは慌てて起き上がる。
言葉はどうせ通じないので、笑ってごまかす。

「……………」

メイドさんは自分のやるべきことを思い出したのか、頭を深く下げて何かを言う。

たぶん朝の挨拶だろう。

この世界で生きていくと決めたのだから、自分もこの世界の言葉を覚えなければいけない。

と、いうことで早速。

メイドさんが言った朝の挨拶っぽい言葉を真似してみる。

発音が怪しいのはご愛嬌ということで流してほしい。

それを聞いたメイドさんは思わずといった風に身体を起こしてオレを見る。

（お？通じた？？）

もしかしたら通じてなかったかもしれないけど、メイドさんのその反応が嬉しくて笑ったら、つられてメイドさんも笑ってくれた。

（おーう可愛いな）

笑顔のまま、メイドさんは衣類と水の入った丸い入れ物を指し示す。

（着替えて顔洗えってことかな？）

鳥に纏わり付かれたせいで、こつちの世界に来てからずっと着ていた制服はかなり汚れたので、有り難く衣服を借りることにする。

（こつという着方でいいのかな？）

布をたつぷり使った服は足首をすっぽり隠すほどに長く、ローブのように上下が繋がっていて、どうやらヒモを腰で縛って長さを調節するみたいだった。

（踏んで転ぶとか避けたいしな。ちょっと短めにしとくか）

後でお礼をしつかりしようと心に誓う。

もう自分は異世界から来たお客さんではないのだ。受けた恩はちゃんと返さなくては、この世界で生きていくための人間関係を築くのが難しくなるだろう。

着替えるのを扉の外で待っていてくれたメイドさんに、扉を開けて着替え終わったことを知らせる。

メイドさんは着替えたオレを見て微笑んでくれた。

（うわゝこのメイドさんの笑顔とむなゝ。やっぱ人間関係には笑顔が大事だよな！）

そんなことを思いながら、どこかへ案内しようとするメイドさんについて歩く。

（さあ！この世界へのデビュー第一日目！
頑張るぞーっ！！）

決意も新たに張り切るオレに、どこからか吹く風が優しく過ぎる。
それがこの世界からの祝福のようで、思わず笑みが零れた。

異世界の勇者、こらえるため息（前書き）

ユイカ視点

異世界の勇者、こらえるため息

気がついたら、異世界でした。

は？

……って言いたい。

本気で頭大丈夫？って聞きたい。

だって私、今の今まで学校にいたんだよ？

特別ではない、日本の、本当に普通の高校だよ？

でも、異世界だと主張する彼らは嘘を言っているような感じではないし、というより日本人に見えないし。

日本語ではない言葉を話してるし、なぜか自分はその言葉がわかるし話せるし。

どう見たってこの場所は日本ではないし。だって島が浮いてる場所なんて、日本にはないでしょう？

だから、うん。ここは異世界なんだと思う。

「ここは貴女方の世界ではありません」

やたら長い金髪の少女が繰り返し教えてくれる。

……実は異世界という意味がよくわかってなかったりするんだけど……つまり地球ではないってことだよな？

そこまではとりあえずわかったから、私と同じように戸惑っている（であろう）クラスメイトにそれを伝える。

彼は私と違って、異世界を主張する人たちの言葉がわからないらしい。

「へへえ」

と、返答された。一応自分なりに、わかりやすく通訳してみたのだけれど……伝わったのかな？

異世界だというのを理解したのかはわからないけれど、自分がただ巻き込まれただけだというのは理解したらしく、かなり落ち込んでいた。

「高崎……大丈夫？」

私が巻き込んだわけではないけど、なんだか申し訳ない……。

……と、思っていたら、いきなり彼は、

「せめて従者ポジションを……！」

と叫んだ。

……本当にわかってるのかな……？

従者ポジションって発想がどこからきたのか気になるけど……

なんだか高崎、遊園地か何かのアトラクションと勘違いしてない？

高崎の言葉を金髪少女に通訳すると、少し考えた後、

「まずは部屋を移動しましょう」

と言い、別の部屋へと案内される。

…石だけで出来てる部屋って初めて見たけど、どうやって崩れないようにしているのか不思議…。

「では、現段階でのお二人の力がどの程度なのかを調べさせていただきます」

そう言って金髪少女は細長いものを両手で差し出してきた。

「こちらの剣を使ってみてください。お相手はこの者がいたします」

金髪少女から示された男性は綺麗に頭を下げ挨拶をした。

…つまり剣を使ってこの男の人と試合をしろってこと？

（剣なんて使ったことないんだけど……）

とか思っていたけれど。

やってみたら意外に楽勝だった。

…楽勝すぎてつまらない。

なんて、口にしたら嫌味に聞こえるかもしれないことを思いながら、ギャラリ―と化していた高崎に剣を渡す。

「うおわっ！」

渡した途端、高崎が剣を落とした。

渡し方がいけなかったのかと思って謝ろうとしたら、どうも単に重くて落としただけのよう。

……重い？

私にはとても軽く感じたのだけれど……

そういえば私には勇者補正の力が働いて、普通の人より遥かに高い能力が与えられると言っていたかもしれない。勇者補正が何かよくわからないけれども。

…でも金髪少女も普通に持っていたような……？

「ごめん。高崎」

とりあえず謝っておいた。

ここでもまた落ち込んでしまった高崎は、またしても、よくわからない理論で発想する。

「あるんだろ？魔法」

……魔法？なんで落ち込んだ結果が魔法に繋がるの？
というか、この世界って魔法があるの？

「あります」

金髪少女に聞いたらあっさり肯定された。

……あるんだ。

金髪少女が今度取り出したのは小さな箱のようなものだった。

「これは魔力を測定するものです。魔力が多い程、強力な魔法が使えますし、寿命が長くなります」

金髪少女はあっさりと言う。

…なんで寿命が長くなるのかって突っ込んでもいいのかな…？

手をかざせと言うので、かざしてみる。

一瞬の後のホワイトアウト。

（目…目が痛い……）

高崎にも言ってもらったけど、目が正常に戻らなくてよく見えなかった。

後で周りの人を見回してみたら、なぜか同情の眼差しで高崎を見ていた。

……なんで？

その後、魔法の使い方や私がやるべき事などの情報を与えられた。実践したわけではないのに、言葉で教えられただけで理解する自分に、

（ああ、これが勇者補正か…）

と、納得する。

それに対する驚きはなかった。むしろ、驚かなかったことに驚いた。なんとなく理解した、というのではなく、確信を持って断言できる。魔法が使えるだろう、ではなく、当然のように魔法は使える。

使ったこともないのに、事実としてそう思う。そう思うことが勇者補正。理解力の有り得ない程の上昇。

それは、とてもつまらないと思う。

基本的に私は、出来るか出来ないかわからないものに挑戦していくのが好き。

何の苦もなく片手間で出来てしまう状況は、非常に面白くない。

高崎はどう思ってるのかな？

言葉がわからないのなら、私よりも退屈しているかもしれない。

実際、夕食の時間までぼんやりしていたし。

豪華な食事を前にしたら元気になったみたいけど。

ついでに食事をすれば魔力が増えるということを教えたら、やたら食べて撃沈した。

本人はいたって真面目なのだろうけど……その極端さに笑ってしまった。

よっぽど魔力が少ないことを気にしてたんだ……まああれだけ周りに同情されまくられていたら気にもなるか……。

自力では動けそうもなかった高崎を支えて部屋まで送ってから、自分に与えられた部屋へ行く。

ちなみに高崎はちっとも重く感じなかった。これも勇者補正らしい。一応、か弱い乙女に分類される性別の自分としては、……けっこう落ち込んだ。

部屋の窓から外を眺める。

自分が知ってるものより大きな月が見えた。

（やっぱりここは地球じゃないんだな…）

わかっている事を、あえて思ってみる。

私は勇者で魔王を倒すのなんて楽勝で、それさえ済めば元いた場所と時間に戻る。その際、こちらでの記憶は消えるので心配いらない。

……なんていきなり言われて納得する人なんていないと思う。理解は出来ても納得は出来ない。

そう、それこそ

「…へへえ」

としか言えない。

高崎もこんな気分だったのかな？

別に相手は押し付けてるつもりはないんだろう。

こちらのことを気遣ってくれていることはわかる。

…でもこちらの意見は聞かない。

否定されてるわけではないようだけど…

自分の存在なんてないかのように、置き去りにされたかのような気分。

きっと私が何もしなくても、ストーリーは当たり前のように進んでいくんだろう。

私はただそれを見てるだけ。

ラストの決まってる映画のように…誰かの夢を無理やり見せられて
るかのように。

ストーリーに手を加えることは許されず、ただ眺めるだけ…

「…せめて、もう少し…」

楽しい夢ならよかったのに。

掴め！？幸運のラッキービッグへ1

爽やかな朝の空気を満喫しながら、オレは食堂っぽいところへ足取りも軽くやってきた。（メイドさんとは入口で別れた）
朝食のいい匂いがしてきて腹が鳴りそうだ。

テーブルの適当な所へ座ると、深沢が室内に入ってくるのが見えたので声をかける。

「はよー」

「…おはよう、高崎」

あれ？なんだか深沢、ちょっと不機嫌っぽい。

「フロにでも入ってきたのか？頭、濡れてる」

気づかないふりで話しかけてみる。

「頭じゃなくて、髪でしょ？」

苦笑しながら深沢は答える。……気のせいだったかな？

「朝練して汚れたから、少し浴びてきたの」

そう言いつつ、深沢は濡れた髪を一撫でする。
それだけで濡れた髪はさらりと乾いた。
魔法かな？

（いーな〜オレも魔法使えるようになるかな？）

こちらの世界の住人になったのだから、魔力は増えていく……はず。
魔法も使えるようになるはずだけど……

（というか魔法の使い方知らないけど。呪文は必要じゃないのか？
今、深沢なにも言わなかったよな？）

……いや、魔法の使い方よりも先に言葉を覚えよう。

深沢がいなくなったら、誰にも通訳してもらえないのだから。

「高崎は今日はどうする？」

テーブルに並べられていく豪勢な食事を見つつ、深沢が問い掛ける。

「どうって…ん〜どうするかな〜。深沢は？」

いやしかし、こんなに朝からたくさん食べるのか？
すごい品数だけど…

オレなら食べるけどさ？
食べるさもちろん。

だって昨日は全部吐いちゃったしな〜

さて、今日は味はするのかな？

………

………

（おおおっウマいっっ！すげーうまい！）

昨日の食事とあまりにも違う味に感動を覚える。

これはこの世界に受け入れてもらえた証拠なのだろうか？

…よくわからんが、そういうことにしておこう。

「私は、今日は魔王退治と一緒に行く人たちを決める大会があるから…それを見に行く」

大会？…運動会みたいなもんか？

「高崎も見に行く？」

あまり乗り気じゃない様子で深沢が聞いてくる。

「大会って何をするんだ？」

「さあ？確か、何かを探す…宝探し？みたいなのだったような…」

…ホントに興味ないんだな、深沢。

「それってオレも参加できる？」

「高崎は最初からメンバーだよ？別に参加しなくても…」

ん…オレが魔王退治？

別についていくメリットなんてないと思うけど…

そんなことより、こちらの世界に早く馴染みたい。

「魔王退治はオレ不参加ってことで！…今日の大会とかは何かおもしろそうかもだし参加してみたい」

というより、こちらの世界の人たちと無理やりにも交流して言葉を少しでも覚えたい。

「おもしろそう…かも？」

「どんなのかわかんないんだし。かも、だろ？」

オレがそう言うのと、深沢はなにやら考え込みはじめた。

「ていうか。選ぶ基準ってなに？深沢が選ぶんだろ？」

そう言ったとたん、深沢は明らかに視線を逸らした。
やはり不機嫌なようだ。

「選ぶのは私じゃない。金髪少女たちが、何かを探して持ってこれた人の中から選ぶらしい」

…深沢、あの金髪美少女の名前知らないのか？（オレも知らないけどさ）

「…それってさ、なんか嫌じゃない？一緒に行くのは深沢なんだろう？だったら深沢が気に入るヤツ選んだほうが楽しいんじゃない？」

オレだったら嫌だ。それって堂々と監視をつけられてるみたいで。
まあ金髪美少女は人が良さそうだからそんなつもりはないんだろうけど。

「私が選ぶといっても…どいう人たちを選べばいいのかわからないし…」

まあ確かに…

それを理由に選ばせてはもらえないかもしれない。

でも多分、今日の大会は参加資格とかあるだろうし。まったく使えないやつが参加してるはずないだろうし。

というか、たとえ素人でも、深沢がいれば何の問題もないと思うけど……

だってチートな勇者だし。

「そんなの深く考えるなよ。深沢と一緒にいて楽しめそうなやつを探せばいいだろ？」

「……うん」

深沢が消極的に頷く。

どうせ選んでも却下されると思ってるのかもしれない。

「何人選ばれる予定なんだ？その人数だけ深沢が選んで、それ以外は脱落させればいいだろ？」

「……脱落させる？」

「そう。ゴールしないように妨害すれば？深沢なら出来るだろ。せっかくの能力なんだから使わないと損だぜ？」

なにも真っ当にやる必要なんてない。邪魔をすればいい。ゴールにたどり着かないように。

自分の選んだやつだけが、そこへ辿り着けるように工作すればいい……… というようなことを深沢が思ったのかは確かじゃないけど、その瞳に強い想いが宿る。

「バレたら一緒に謝ってくれる？」

いたずらを仕掛ける前の楽しそうな笑顔で深沢が聞いてくる。
その顔を見るかぎり、バレずにやる自信があるようだ。
だからオレも同じように笑って答える。

「バレなきゃいいんだろ？」

おお、なんか楽しくなってきたな！
何を探すのかはわかんないけど、いろんな人とたくさん交流できた
らしいな。

掴め！？幸運のラッキービッグへ2

「おお」

集合場所になっているらしい外の広場に行くと、大勢の人が集まっていた。

おそらくここにいる全員が、今日のイベントに参加するのだろう。ほとんどが男ばかりで、女性は数える程しかない。

（女の人は魔王退治には行きたがらないってことか？）

そんなことを思いながら見回していたら、深沢が走り寄って来るのに気がついた。

「高崎！」

深沢がオレの名前を呼んだとたん、回りからたくさんの視線が突き刺さった。

（……………なにかなコレは？）

まさか…深沢、変なフラグ立てたんじゃないだろうな？

まわりはともかく、深沢は普通に今日のイベントの詳細を説明してくれる。

要約すると、

近くの森にある何か（興味がなかったので宝物？の詳細は聞き流し

た）を持ってスタート地点まで戻ってくることに。持つてなくても夕方までには戻ること。指定の時間までに戻れなければ、どんな理由があろうと失格となること。

そして何と…森の中にはトラップが仕掛けてある…らしい。

（…もしかしたら思ったより危険…？）

「私と高崎はそんなこと関係なく自由に参加していいって言われたけど……トラップが多いらしくて、高崎にはキツイかも……」

どうする？と聞かれてオレは速攻返事をする。

「参加するに決まってるじゃん？」

いくら危険っていったって、まさか命の危険ってほどでもないだろう。多分。

（なんとかなるなる！）

ただチートな勇者様にはついていける自信がなかったので、深沢には別行動をお願いした。

「で？どうやって選ぶんだ？」

巻き込まれたら堪らないので、深沢の行動を一応把握して置こうと思ひ聞くと、深沢はにやりと笑った。

「もう選んだよ。あとは他の人に、指定の時間を過ぎてからゴールしてくれるようお願いするだけ」

『お願い』が何を意味するのかは、あえて聞かないでおいた。
というより、その顔は勇者がしていい表情ではないと思う。

そこまで話し終わると、ちょうどスタートの合図が響き渡った。
その場にいた参加者の皆さんはなぜかオレを睨んでから森のほうへ
駆け出して行く。

もしかしてライバル認定されたとかだろうか？……いや、ないな。
だってオレは金髪少女より遥かに弱いんだぜ？…自分で言ってる泣
けてくる事実だが。

（まあとりあえず。森に行ってみますかね？）

なんだか地元の人たちと交流とかって無理そうな雰囲気なのだけど
……と思いながら、深沢と分かれて森に入る。

……
……

はい、ここで質問です。

なぜにオレはごっついおじ様方に追い掛けられているのでしょうか？

（なんでっ！？オレより先に森に入っただけの人達が後ろから来る
んだよっ？）

まあ、普通に考えれば待ち伏せをされていたのだろうけれど…

（もしかしてアレか？！この大会ってサバイバルなのか！）

一番弱そうなオレから潰そうという狙いなのかもしれない。

「オレ参加者じゃねーし！オレ潰しても意味ないですよー」

…なんて言っても通じるわけないのだけど。

後ろのおじ様方の言葉もちろんわからないのだが、聞いてるうちにある単語が頻繁に出てきてることに気がついた。

「……ユイ！……」

（…ユイ？んゝなんだか名前っぽい？）

………

………あつ！わかった！！

深沢のことか！

たしかあいつの名前がそんなだったはず。

（なんで深沢の名前連呼しながらオレを追ってくるんだ？）

よくわからないが、あまり友好的な雰囲気ではなさそうなので全力で逃げることにする。

ただまっすぐ走ってもすぐに追いつかれそうだったので、右に左に不規則に走り森の木々を利用し撒く。

時々後ろから聞こえる悲鳴を無視してひたすら走ったら、いつの間にかおじ様方はいなくなっていた。

（トラップに掛かったのか？…ラッキーだけど…）

ぐるりと四方を見回す。

深い森の中。どこを見ても木ばかりだ。繁る枝葉に空も見えない。

(……………もしかして、迷った…?)

冷や汗が流れる。

うわ。

うわ……

……………マジかよ？

掴め！？幸運のラッキービッグへ3《

迷子の鉄則は、迷ったと気づいた時点でその場を動かないこと。

……なんだけど。

（どっちみち既に迷っているなら、さらに動き回っても一緒だよな？）

そう思い、明るそうな方向へ歩きだす。

少ししたら開けた場所に出た。小さな花が咲き乱れる花園のような場所だ。

見上げると鳥の群れがゆっくり飛んでいるのが見えたので、オレは餌を取り出す。朝、大会に参加する前にメイドさんに頼んで分けてもらったのだ。

ジェスチャーだけでわかってくれたメイドさんは素晴らしい！

「おゝい。朝はゴメンなー？餌もらってきたぞー」

空に向かって声を上げると、それが聞こえたのか鳥たちが降下してきた。

「ぎゃーっ」

朝と同じく、勢いをつけてたからだったので花畑に倒れ込んでしまう。

（あゝ…キレイだから踏まないように気をつけてたのに…）

そんなことお構いなしな鳥の大群にたかられていると、少し離れた場所から小さく笑う声が聞こえた。

それを聞いたからか、鳥たちは慌てて空へ帰っていく。

（つ、疲れた…）

主に精神的に。

餌が回りに散らばっているのを見て更にげんなりする。…餌を食べずに散らかして、なにがしたかったのかあの鳥たちは…。

「……………」

何かを語りかける声の方向に、仰向けに倒れ込んだまま視線を向けると、やたら整った顔立ちの男の人がいた。

（異世界トリップのパターンで言うと、ここで登場するのは王族なんだけど？）

…なんて、バカなことを考えてしまった。

だいたい勇者は深沢でオレはただのおまけなんだからそんなパターンにははまらないだろう。

…とはいえ。貴族的というか…上流階級の人間であるような印象を受ける。（こちらの世界の身分制度がどんなものかわからないが…）

やたら姿勢が良く、服はシンプルだが品がいい。

ちよつと痩せているが、騎士というのはこんなかんじなのかもしれない。

遠くて眼の色はわからないが、長く伸ばされ背中では括られた髪は自分と同じ黒色だ。

その男の人は、何かを言いながら、空を指したりオレを指したりす

る。

（…いや、オレを指してるんじゃないくて？餌、か？）

餌を指して空を指して首を振る。

（あっ！わかった！これ、鳥の餌じゃないんだ！）

……………じゃあ、何の餌なんだ？

メイドさんに通じたと思ったのは勘違いだったのか…。がつくりだ。

オレが理解したことに気づいたらしく、その男の人（言いにくいな… 仮にお兄さんと呼ぼう）はオレの向こう側を指差す。

そこには小さな白い兎（のような動物）がいて、こちらを伺っていた。

（兎っぱいけど…兎よりしっぱが長いな）

なんて思いつつ。お兄さんを振り返ると、またしてもお兄さんは餌を指差す。

（…これを食べさせろってことかな？）

そう思い、クッキーのような餌をひとつ取って兎の意識を引き寄せようと寝転がったまま腕だけを振る。（さすがに立ち上がったら逃げられるだろうから。）

意識が餌に行つたのを確認してから餌を放る。それは兎の少し手前でぼとりと落ちた。

慎重に慎重ににじり寄って、オレが動かないのを確かめてから餌にかぶりつく。

（か、可愛いすぎる！）

あまりの可愛いさににまにまするオレに、早くも食べ終わった兎は次を催促するようにじっと見つめる。

何度か同じことをしつつ距離を短くして、とうとう兎は手の届く位置まで近づいてきた。

試しに餌を持ったままの手を兎に近づけると、兎はそのまま餌ごと抱き着いて食べた。どうやらオレに慣れたらしい。

可愛いすぎるやつめ。

オレが何もしないのに気づいたからか、腹の上に飛び乗って、そこにこぼれていた餌を食べはじめる。

そのときになって初めて、お兄さんはオレに近づいてきた。

兎を驚かさないようにじっと待っててくれたらしい。

いい人だ。

「————」

すぐ側まで来たお兄さんは何かを言いながらひざまづいた。近くで見るお兄さんの顔はやはり美形だ。

瞳の色は深い青。切れ長で全体的に冷たい印象を受ける。

「————ビッグ」

お兄さんが兎を指差しながら言った。

（ビッグ？）

何度聞き返してもお兄さんは兎のことをビッグと言う。
名前だろうか…？

いや、しかし。

（こんなに小さいのにビッグだなんてっ）

多分というか絶対こちらではその意味じゃないのだろうけど。ついそう思ってしまう。

「よし！お前の名前はビィな！」

略しただけだが。自分的にはビッグよりは違和感がなくて可愛いと思う。

兎は自分のことを言われたのを理解したのか、「グウ」と鳴いた。なんだその鳴き声。可愛いすぎるだろ。

お兄さんも可愛いと思ってくれたのか、何かを言ってふわりと笑った。

冷たい人かと思ったけど、笑うと柔らかい印象で優しそうだ。

（美形はどんな表情でも様になるってホントなんだな〜）

なんて思ってたら、お兄さんが長々と何かを言う。視線が合わないでオレに言ってるわけではなさそうだが…

（もしかしてこれ呪文？何か魔法を使おうとしてる？…でも深沢が魔法を使ったときには何も呪文らしきものはなかったけど……）

少し不安になりながらお兄さんを見てみると、呪文を言い終えたお兄さんがそれに気づき、安心させるかのように小さく微笑んでくれた。

（静かに笑う人だな）

その笑顔が近づく。

何をするのかと不思議に思い、何気なく眺めていると……

でこチューをされてしまいました。

………は？なんで？

………
…何か魔法を使われるのかと思ってちょっとビビった自分を叱り付けたい気分だな。

掴め！？幸運のラッキービッグへ4

でこチューをされてしまいました。
でこチューをされてしまいました。
でこチューをされてしまいました。

いやいやいや。

なんで？

この世界では挨拶なのだろうか？

「同性に口づけられるのは不快か？…すまない。祝福の魔法を使うにはそれが一番効果が出やすいのだ」

少しだけ申し訳なさそうな表情をしてお兄さんが言う。あんまり大きく表情を変える人じゃないんだな、と思う。

（…いや、そうじゃなくて。）

ツッコミ所が多すぎて関係ないことを考えてしまった。

「言葉がわかる…」

そう言った自分の言葉に違和感を覚える。

…今自分は何語を話した？

「祝福の魔法をかけさせてもらった。勇者がこちらの世界に来たとき、すぐに言葉を理解しただろうか？」

それと同じものらしい。

わざわざかけに来てくれたのだろうか？

「ありがとうございます！」

勢いよく起き上がったら、腹の上に乗ったままだったビィが転がっていった。

「わあっ！ゴメンっ！ビィ」

ビィはグウと不満の声を上げたが、膝の上によじ登って許してくれた。

本気で懷かれたみたいだ。

お詫びに餌を拾ってビィに与えつつ、お兄さんの話を聴く。

お兄さんいわく、祝福の魔法はかけられたほうの意識に強く左右されるもので、いくらお兄さんが魔法をかけて（しかもそれが成功したとして）も、オレに言葉を覚える気がなければ効果はあまりないらしい。

逆に言えば、覚える気があればあるほど理解するのが早いらしい。

「それだけ君が頑張ったという証拠だ。かけられてすぐに効果が出るなんて珍しい」

これは褒められてる…のかな？
なんだか恥ずかしいというか嬉しいというか…

あれ？でも夢の中で会ったあの人からも祝福の魔法をかけてもらった気がするけど…

「祝福の魔法って言葉がわかるようになる魔法なんですか？」

オレの多分初歩的な質問に嫌そうなそぶりも見せず、お兄さんは丁寧に教えてくれる。

「いや、そうとは限らない。今回は私が言葉の疎通を願ったためにその結果になった」

そうなのか…

だとしたら、夢の中のあの人は何を願ったんだろうか？

「…やはり。誰かに祝福の魔法をかけてもらったのか？」

やはり？

疑問形なのに断定とは…何かそうするだけの結果が目に見えているのだろうか？

考えてもわからないので、夢の中であったことをお兄さんに話してみる。

「世界に祝福をもらったのか。どおりで…

一日持ちそうにもなかった君が今日はとても元気だから何故なのかと思っていた」

世界？スケールでかいな。

お兄さんはあっさり言っただけ、それって普通のことなのか？
っていうか。

………オレって一日持ちそうにもなかったのか。
だから金髪美少女たちが同情してたのか…

（そうとうヤバかったんだな…

祝福と加護をもらえたから生きてるってことかな？）

「そうか…。この世界の住人になったのだな」

しみじみとお兄さんが呟く。その顔は少し嬉しそうだ。

（喜ばれてるのかな？ だったら嬉しいな～）

「これからどうするのかは… もう決めているのか？」

オレの横に座り込みながらお兄さんが聞いてくる。

その言葉に、少し考えたくて視線をビーに戻す。ビーは満腹になったからか、膝の上で丸まって寝ていた。

「…とりあえず、働けるところを探そうと思ってます。できればいろんな所を見て回りたいので、移動しながら働けるような仕事があれば理想的なんですけど…」

せっかくだから世界を見て回りたいのだが… なにはともあれ、お金がなくては話にならない。

ゲームでいうところの冒険者ギルドとかあればマジで理想的なのだが。

まあそれがなくても、お兄さんが言葉をわかるようにしてくれたおかげで、選べる職種が増えたのでなんとかなるかもしれない。

「それだつたら…」

と言うお兄さんの話を聴くと。この世界にも冒険者ギルドらしきものがあるらしい。ラッキーだ。

討伐系のは出来そうもないが（剣も魔法も使えないので）街の中の依頼を受けて地道に稼げばなんとか生活出来そうだ。

「ありがとうございます！これだったら何とかやっていけそうです。早速ギルドに登録してみます！」

「最初は大手のギルドに登録するといい。」

そう言いながら、お兄さんはベルトについた小物入れっぱいところから梨っぱいものを取り出した。

……………ん？

なんだか大きさがおかしいけど？

そんな小さな場所から手の平大のものが出てくるのおかしいだろ？

（魔法……………なのかな？）

お兄さんがくれると言うので梨っぱいものを受け取る。味もやっぱり梨っぱい。さっぱりしてて美味かった。

「それ、魔法ですか？」

あんまり質問はしないようにしようと思っていたけど（ウザがられてもいけないので）好奇心が抑え切れず、つい聞いてしまった。ら、お兄さんは一瞬びっくりしたように動きを止めた。

（…もしかして聞くのもバカらしいぐらいの常識？）

「…ああ。これには循環の魔法がかけられている。収納したいと願えば勝手に収納されるし、出したい時はその物を思い浮かべながら

出したいと願えばいい。
入れ物自体は小さいが、中の空間は広いからどんな大きな物も入れられる。」

あゝ…簡単に言うと、四次元ポケット的なアレか？

「荷物がかさ張らなくて移動するのに便利そうですね」

いいなゝ欲しいなゝ

異世界トリップの主人公たちはたいてい自分で作ったりしてたけど…
オレは魔力あんまりないから作れないだろうし。
売ってたりとかすれば買いたいところだ。

……あまり高いなら買えないけれど……なんて考えてたら、

「大手のギルドなら、登録すれば貰える」

お兄さんが親切に教えてくれた。
なんだ。それを早く言ってくれ。

「…もしかして君は魔法の使い方を知らされていないのか？」

…知らされるもなにも…

魔力があんなに少ないと魔法は使えないものなんじゃ…？
と、いうことをそのまま伝えたら、

「世界から祝福と加護を与えられた者が、魔法が使えないなんてことはありえない」

だそつです。

マジで？オレ魔法使えるの？

いやった

っ！！

希望の光っ

やっぱり使ってみたいもんな！魔法っ！

掴め！？幸運のラッキービッグへ5

と、いうことで。

魔法の使い方をお兄さんに習うことになった。

なにからなにまでお世話になります。多分お兄さんには一生頭が上がりないと思います！

「まずは…そうだな…魔力の総量から説明したほうがいいか…」

そう言つて、お兄さんはベルトの小物入れから陶器（だと思われる）のコップをとりだした。

「魔力の最大容量というのは生まれたときからだいたい決まっている。例えば、このコップが一人一人分の最大容量だとすると…」

言いながらお兄さんはコップのフチぎりぎりまで水を入れる。

（…どこからその水を出したのかとか突っ込んだらダメかな…）

おそらくそれも魔法なのだろうが…

「このコップ一杯分が魔力の最大総量になる。

魔法によって魔力の消費量は変わるが、使えば使うほど減つてしまふから補充をしなければいけない。

だがどんなに頑張つても、魔力の最大総量はコップ一杯分にしかないゆえに、それ以上の魔力を消費する魔法は使うことが出来ない。」

説明しながら、コップに入った水を減らしたり増やしたりするお兄さん。

…さっきからお兄さんは魔法を使っているが…大丈夫なのだろうか…説明を聴くかぎり、使えば使うほど魔力は減るから補充しないとヤバいという意味に聞こえるんだけど。

「補充ってどうやるんですか？」

「食事や睡眠…あとは日光浴とかだな」

ああ、深沢が言っていたのはやっぱり魔力を増やす方法じゃなくて回復する方法だったんだな。

…しかし、日光浴？

「こっやって自然に囲まれた場所にいるだけでも魔力は補充される」

へ…そうなんだ。

だからお兄さんは平気そうにしてるんだな。

「魔力の最大容量は一生変わることはない。…が、まれにそれを増やせる者がいる」

増やす？

増やせるのか？

それは是非とも聴きたい！

オレの魔力は少ないからな

もう少しあったほうが魔法も使いやすいと思うし…

「オレっ！オレも増やせますか？」

勢いよく聞くオレに、お兄さんは苦笑して頷く。

「ああ。君は世界から加護を受けている。やり方次第で増やすことが可能だ」

「どうやって増やすんですか？」

「……………さあ？」

…は？

今、お兄さん、さあ？って言った？

「増やし方は人によって違うようだ。いろいろ試してみるといい」

ええゝ

マジかよ…………

「で、肝心の魔法の使い方だが…
基本的に魔法を使うのに必要なものは、『魔力』と『想像力』と『きっかけ』だ」

魔力と想像力まではわかるけど…
きっかけて何だろう？

「例えば…」

と言いながら、お兄さんはコップを示す。

「この水を増やそうと思ったら、
水が増えることを想像して、『増えろ』と言う」

「きっかけて…呪文ってことですか？」

「…呪文のほうがりやすいということだ」

お兄さんが言うには、呪文でなくても、何かに触ったり手を叩いたり…とにかく自分が『魔法が発動するきっかけ』だと認識できるものであれば何でもいいらしい。

やってみるとばかりに、お兄さんがコップを差し出してきたので受け取る。

「…『増える』」

想像して呪文を口にしたとたん、大量の水が頭上から落ちてきた。

ザバアって。マジでザバアって！

おかげで自分だけじゃなく、膝で丸まったビィと隣にいたお兄さんもずぶ濡れになってしまった。

……なんで？

「ググウっ」

ビィが不満そうに鳴く。

「…ごめん」

マジでごめん。

落ち込んでいたら、お兄さんが魔法をかけてくれたらしく、きれいに服もまわりも乾いていた。

「さすが世界に祝福を受けし者だな。精霊たちが君の期待に応えようと張り切りすぎたようだ」

……この世界、精霊がいるの？

それは見てみたいな」

……なんて、現実逃避してみたり。

「……すみません」

オレが謝ると、お兄さんは気にしていないかのように笑んだ。

「最初から上手くできるとは限らない。……が、しかし。君の今現在の魔力総量がどのくらいかわからないうちは、あまり魔法は使わないほうがいいだろう。」

……少しずつ慣らしていけばいい」

うう……お兄さんの優しさが目に染みる……

「……そろそろ時間だ。戻ろう」

え？！もうそんな時間？

じゃあ寂しいけど、ビィとはここでお別れだな。

そう思っ**て**ビィを帰そうとするのを、お兄さんが不思議そうに見ていた。

「連れていけないのか？」

いやいや。連れて行ってどうするんですか。

「自分のこともちゃんとやれるかわかんないですし…連れていくのはちょっと……」

と、言葉を濁したら、お兄さんは少し考えた後、はっきりと聞いてきた。

「お金の問題か？」

…それもあるけど…

野生の動物が懐いたからって連れていくって発想もどうかと……

「…これを」

と言ってお兄さんは例の小物入れから宝石っぽい物を取り出して渡して来る。

思わず受けとったけど…
どうしろと？

「ギルドに持っていけば換金してくれる」

「え！？」

「それなりの金額になるはずだ。当座の生活費にすればいい」

ええ?! いいのかな？

そりゃオレとしては助かるけど…

オレの戸惑いを感じたからか、お兄さんは条件をつけてきた。

「ただし。そのラッキービッグを連れていくこと。換金して得たお金は『サロク・ロクフ』国内でのみ使うこと」

ビィの正式名はラッキービッグだったのか。…じゃなくて。サロク・ロクフってどこ？

「サロク・ロクフは私の国だ。三国のうち一番治安が悪いところなのだが…」

言いにくそうにするお兄さんを遮って聞いてみる。

「オレが生活していくのは難しい所なんですか？」

「…いや。余程運が悪くないかぎり、普通に生活することに問題はない」

ふん？

なら、その国にまず行ってみるかな？

「じゃあ、その国に行ってみようと思います。お兄さんの国がどんなところか見てもみたいですし」

とオレが言ったとたん、お兄さんは動きを止めた。

ん？また変なこと言ったかな？

「…………お兄さん？」

お兄さんがぎこちなく聞き返してくる。

…あ、しまった。口がすべった。

まずいな、怒られるかな？と思っていたら、お兄さんは笑って許してくれた。

「そんなふうに呼ばれたことはないから新鮮だ」

と言ってくれた。

名前で呼ばれなくてもいいなんて…変わった人だ。
でもいい人だ。

「あ、オレはゼンです！…挨拶が遅くなってすみませんっ」

今ごろ挨拶するとかバカだろオレ…

よし！

最初の行き先はサロク・ロクフで決定だな！

どんな所なのかな？ワクワクしてきたっ

掴め！？幸運のラッキービッグへ6

森の入り口でお兄さんと別れて、最初のスタート地点まで戻ると、すでに選抜は終わっていた。

金髪美少女たちと談笑してたらしい深沢はオレに気づくと走り寄って嬉しそうにピースしてみせた。
どうやら作戦は成功したらしい。

「高崎もラッキービッグ捕まえられたんだね」

「…？も、って？」

深沢が何を言いたいのかわからず、聞き返す。
ちなみにビィは器用に左肩に乗っている。

「…高崎、ちゃんとこの大会のルール聴いてた？ラッキービッグを連れ帰れた人が合格なんだよ？」

……聴いてませんでした。

「…ん？あれ？高崎、こっちの言葉を話してる？」

お。気づいたか。

「オレの目的はラッキービッグじゃなかったからな」

深沢を真似てピースしてみせた。

お互いの目標が達成されたことに二人で喜んでいたら、不合格だったらしい皆様方がものすごい目つきで睨んできた。

…不合格になったのはオレのせいじゃないんだけど？

「行こう、高崎。もうすぐ夕ご飯だって」

深沢の誘いに頷き、建物の中に入ると、朝お世話してくれたメイドさんが出迎えてくれた。

（…このメイドさん、もしかしてオレ専属？）

なんだか少し恥ずかしい。

オレただのおまけなんだから、そんなにしてくれなくてもいいのに…とか思ってしまう。

「あ、深沢。オレ、明日サロク・ロクフって国に行くから」

今日でお別れと言うオレに、深沢もメイドさんもびくりしてる。

（というかメイドさんはオレがこちらの世界の言葉を話してることに驚いてた）

…いきなりすぎたか？

「なんで？魔王討伐は？」

いや、それは行かないって言ったよな？

深沢（と、ついでにメイドさん）に、こちらの世界で生きていくと決めたことを伝える。

深沢はなんだか納得いかないようだったが、オレの決心が本気なものだと理解してくれたらしく、最後には応援してくれた。

……のはいいんだけど。

その後が大変だった。

明日は勇者一行が魔王討伐に出発するので今夜はパーティーのようなものをするらしく、メイドさんたちや執事？さんたち使用人扱い人たちはその準備に大忙し。
なのに。

オレが明日ここを出ていくと言ったばかりに。

メイドさんたちはさらに大慌て。

オレ用の装備を用意するから、それを是非着て行って欲しい、と言われてしまった。

どうもこの人たちはオレに罪悪感のようなものを持っているみたいだ。

…別に巻き込まれたのは誰のせいでもないのに…気にしないでいいのにな。

………っていうか、装備って？

そんなにこの世界は危険なの？

お兄さんはそんなこと言ってなかったけどな

「あの、夕ご飯は部屋で食べてもいいですか？」

メイドさんに聞くと、笑顔で了承してオレの分の食事を取り分けて部屋まで持ってきてくれた。

だって関係ないオレがパーティーに出るとかどうかな～と思ったし…（忙しいのに余計な手間をかけてメイドさんには申しわけなかったけど）

ちなみにメイドさんにビィに何を食べさせたらいいかを聞くと、オレと同じものでいいらしい。動物なのにグルメだな。

「好き嫌いは示しますので、食べたがっているものを差し上げてく

ださい」

そんな甘やかした育て方でいいんだろうか…

「ラッキービッグは幸運を呼ぶと言われています。あまり束縛したりせず、好きに行動させていたほうが、幸せへの近道になるのだそうです」

メイドさんが笑顔で教えてくれた。

へーそうなのか。

食事も完食して満腹感に浸りつつベッドに横になる。ビィもベッドに飛び乗り、枕の横に座り込んだ。

「サロク・ロクフってどんなところだろな？」

オレの言葉に、ビィは耳をひくひくさせて反応する。耳元を撫でたら気持ち良さそうに目を閉じた。

そんなビィを見ていたら、睡魔は当たり前のようにやってきて、サロク・ロクフがどんな所かも想像する間もなく…

あっという間に眠りについた。

この世界を選んでくれた君へ出来ること

ラギ視点

『サロク・ロクフ』の新王。

ゼンからはお兄さんと呼ばれている。

勇者召喚の儀。

それは理の中に組み込まれた誰も介入の出来ないもの。
失敗などあるはずがなかった。

しかし。

今回の召喚には予定外の存在まで一緒に召喚されてしまった。

何故、と理由を問うても誰も答える事など出来ない。

元の世界へ帰れるかどうかもわからない。

…彼には諦めてもらうしかないだろう。

「あら、なんて可哀相なコかしら。同情しちゃ〜う」

可愛い（と評判らしい）声で『リウナ・リイナ』の王は感想を述べる。

だが言葉ほどには興味はない様子だ。そもそも彼女は魔王討伐にも興味は持っていない。

「軟弱そうな子よの。」

『ハイレ・ハイネ』の王が女性にしては低めの声で述べる。
別名『武の国』と言われるだけあって、その女王も強い者にしか興味を持たないようだ。

「我は勇者の指導で手一杯ゆえ、どちらかが彼の子の世話をしいや」
魔王討伐へ赴く勇者を導くのは『ハイレ・ハイネ』の王の役割だ。
今回の件に関しては私が、『リウナ・リイナ』の王のどちらかが対応すべきだろう。

「ええゝ？あたしが思うに、あのコそんなに長くないと思うけど？」

自分は関わりたくないと言いたげな声。…つまり『リウナ・リイナ』の王は私にやれと言いたいのだろう。

「…では私が…」

断る理由もなかったので、了承の意を送る。
それを合図に、その場に響いていた声が気配と共に途絶えた。

(……引き受けたはいいが……)

世話とは…何をすればいいのだろう。『リウナ・リイナ』の王の言うとおり、彼に残された時間は長くない。

魔力測定のときの総量から、異世界の彼は、次の日の目覚めは難しいだろうと思われた。
魔力を補充している様子がないのだ。早晩、尽きるだろう。

魔力がなければこの世界では生きてはいけない。

……と思っていたのだが。

次の日の魔王討伐メンバー選考大会に元氣に参加しているのは何故なのだろう…。

気になったので、後をつけてみると、なぜか他の参加者たちから追いつけられなかった。

誰かを潰せばその分、己が合格する確率が上がるとでも思っているのだろうか？

愚かしい。

彼を助けようと、魔法を使おうとしたのだが、追いつ手の参加者たちは次々にトラップに引っ掛かっていく。

足元に隠されたロープに引っ掛かり高所まで吊り上げられたり、頭上から粘りのある液体が落ちてきて身動きできなくなったり、……なんだか今回のトラップは子供の悪戯のような内容だが、その分タチが悪い。

それにしても…先に通った彼にはトラップは作動しないのに、後から通った追いつ手共にはしっかり反応するのは何故なのか。

（トラップ自体が相手を選んでる？…そんなまさか…）

術者が近くにいないのにそんな高度な魔法を使える者がいるわけ…

……勇者になら可能かもしれないが、それこそまさかだ。する意味

がないだろう。

とにかく、私が手を出すこともなく、追っ手共は脱落した。

おそらく道がわからなくなったであろう彼に、話しかけて道を教えるべきか迷ってるうちに、彼は何故か鳥に遊ばれていた。

思わず笑ってしまった。

今大会用に用意されたラッキービッグの餌を、鳥にやろうとしていたらしいので、それは鳥の餌ではないことを伝える。

……言葉が通じないのはけっこう不便だ。

言葉が通じるように祝福の魔法をかけよう。彼も不便だと思ってるかもしれない。

祝福の魔法は初めて使うから成功するか不安だが。

きっかけの二重かけをしてみよう。成功率が上がるかもしれない。

彼はいきなり口づけられたことに驚いていたようだ。

やはりやり方を間違えただろうか。

……成功したから良しとしよう。

やっと普通に話せるようになって、疑問に思っていたことを聞いてみた。

話を聞くかぎり、どうやら世界に祝福と加護を与えてもらったようだ。

そうか。加護を得たのか。

「それ、魔法ですか？」

彼のその言葉に驚いた。

そうか。彼は魔法についてもこの世界の常識も何もかも知らないのだ。

わかっていたはずなのに、それをきちんと理解してなかった自分に愕然とした。

不便だろうからと、自分の都合で解釈して同情して勝手に魔法をかけて勝手に自己満足して…相手のことを何も考えていなかった…なんて傲慢さだろう。己が恥ずかしい。

ごまかすように魔石を渡す。かなり高密度の魔石だからいい値段で売れるだろう。

お金で解決したようで後味が悪い気がするが…

ついでに自国へ誘導してみる。そのほうがいろいろ融通をきかせやすいだろうから。

しかし、遠回しだが、私が『サロク・ロクフ』の王だと言ったのに、彼は私の祖国がそうなのだと受けとったようだ。

…間違いではないのだが。

しかも私のことを、心の中で「お兄さん」と呼んでいたらしい。名乗っていないので名前を呼ばれないのは別に気にしないが…まさかそんなふうに呼ばれるとは。おもしろすぎる。

弟がいたら、こんなかんじなのだろうか。
楽しい。と思う。

彼はそんなふうには思っていないだろうが…

そうだな、弟ができたつもりで接してみよう。
世話と言われても何をすればいいかわからないしな。

「今日、私と会ったことは誰にも言わないで欲しい」

あんまり手を出しすぎてもあの二人の王は何か言ってきたら。
他の者たちにも下手に騒がれてしまいたくない。
王と面識があることが、良い方向の事柄に繋がるとも思えない。

「秘密ですなっわかりました！」

清々しい程の笑顔で彼、ゼンが答える。
素直な子だ。

兄のように。見守ろうと思える。
せめてこの世界に慣れるまで。

この世界を選んだことを、後悔することのないように。

遭遇？ミルミルと海の精霊石 〈1〉

出発は深沢たち勇者御一行の後になった。当たり前か。

彼らは、深沢が作ったらしい光の門をくぐり、魔王がいるとされる『ハイレ・ハイン』国に向かう。

魔王討伐へ行く深沢たちを、広場にいた大勢の人たちと見送る。門をくぐる直前、深沢は振り返りオレを見つけると少し笑った。別に仲が良かったわけではないけれど、これが最後の別れになるのだと思うと寂しい気がする。

深沢もそう思っただろう。笑顔に元気がない。オレはわざと軽い笑顔で『頑張れ』の意味を込めて片手を上げる。オレも頑張るし。

「ん、じゃあ、オレも行きますか！」

声にしてから、もう一度建物の中へ入る。

さすがに勇者たちを差し置いてオレの準備を優先してほしいとは言えなかったのだ、まだ装備品を受け取ってなかったのだ。

（装備品って…鎧とかかなー？あんまり重いと着れないかも…）

そんなときはせっかくの好意だが丁重にお断りしよう。と思いつつ部屋に戻ると、メイドさんがすでに用意していてくれた。見ると普通の服っぽいので安心した。

「こちらの服にはいろいろと魔法を織り込んであります。」

失礼ですがあまり耐性がおありではない様子だったので…とメイドさんが言いにくそうに言う。

誰に耐性がないって…オレだよな…

魔力の少ないことや剣を持てる程の力もないことも知っているメイドさんたちは気を使って服に耐性を上げる（補う？）魔法をかけてくれたらしい。感謝だ。

用意されていたのは、長袖の白い綿っぽいシャツに、下は黒のズボン、靴は編み上げ式のショートブーツ。

着てみるとすごく軽く感じる。動きやすいし。

その上に膝丈の薄手のコートを羽織り、ウエストポーチっぽいものをベルト代わりに巻き着ける。

お兄さんから貰った宝石っぽいものはその中に入れた。

（おお…いいかんじ？）

なんかいかにも旅立ち！という気がしてテンションが上がる。

ビイも興奮しているのか、長いしっぽの先をぱたぱたさせている。

「よくお似合いです。」

どこか違和感などはございませんか？」

着替え終わったオレを見て、メイドさんは笑顔で聞いてくる。

「ありがとうございます。とっても着心地がいいです！」

服を貰えるだけでも有り難いのに、魔法までかけてくれるなんて、感謝してもしきれない。

こちらのお金を持っていないので、正直どうしようかと思っていた

のだ。

「あの、『サロク・ロクフ』って遠いんですか？」

お兄さんから貰った宝石っぽいものを換金すればいくらにはなる
みたいだけど、ここは『サロク・ロクフ』ではないからどっちみち
使えない。

そこまで行くのにどれぐらいかかるのか…

「塔を出てしばらく歩くと『転移門』があります。そこを通ればす
ぐに『サロク・ロクフ』国ですよ」

転移門が何かと聞いたら、さっき深沢が出してた光の門のことらし
い。

遠い場所に一瞬で行けるようだ。

なんだ。すぐなのか。

だったらお金の心配はしなくてもよさそうだな。

じゃあ、さくつと行きますか。

遭遇？ミルミルと海の精霊石へ2

建物の入口まで見送ってくれたメイドさんと別れ、転移門までの一本道をてくてく歩く。

ビィは定位置と決めたのか、左肩で大人しくしている。

道の両脇は緑に囲まれ、朝の空気の残る景色に心がはずむ。

いよいよ新生活が始まるのだ。

ドキドキするのが当たり前！な気分で歩いていたら、白い壁の建物が見えてきた。

「…ここかな？」

きよろきよろしながらその建物に入ると、中には二人の女性がいて、「こんにちは」と素敵スマイルで挨拶してきた。

二人とも同じ服を着ているから、きっと受付の人たちなんだろう。

「こんにちは。あの、『サロク・ロクフ』に行きたいんですけど…」

「はい。『サロク・ロクフ』への転移は5万ソルになります」

「……………なんだと？
ソルってお金か？お金がいるのか？」

「島の方ですか？この島ではあまりお金は使用されませんのでご存知ないのかもですが…他の国ではお金がないと生活できないんですよ」

地元民と勘違いしたらしく、受付のお姉さんは親切にも説明してく

れた。

そうか。ここは島なのか。

お金の流通がなくて田舎ってことだろうか。

自給自足の物々交換で生活してるってことなのか？

…もしそうなら、お兄さんに貰ったあれも換金出来ない。

（お金がいるなんて聞いてないんだけど…）

いや、ちゃんと聞かなかったオレが悪いんだけど…

お金はかからないんだと思い込んで話題を振らなかったのは失敗したな。

「あの…、船で行かれてはどうですか？お値段も転移門より安いですし…」

オレのあまりの落ち込みぶりに、お姉さんたちは同情して声をかけてくれる。

「交渉しだいではもつとお安くなるかもしれませんよ？」

お。交渉できるの？

「転移門は国の施設なので割り引きできず…申し訳ありません」

二人とも本当に申し訳ないという表情で頭を下げるのでオレは慌てる。

「えっいえ！気にしないでください！

教えてくれてありがとうございます。そっちに行ってみます！」

お姉さんたちに港のあるところを聞き、再び歩きだす。港までは一本道なので迷うこともないので、あっちこっちと景色を楽しみながら歩く。

転移門を過ぎたあたりから野が広がりはじめ、畑があちこちに見られた。

（何作つてあるんだろ？こっちの野菜とか、どんな形してんのかな）

と思っていたら、目の前から人がやってきた。

たくさん野菜？が詰められた大きな籠を抱えたおばさんだ。重たげもなく運ぶおばさんに、思わず尊敬の眼差しを送ってしまう。

「こんにちは」

笑顔で挨拶すると、おばさんは豪快にニカツと笑ってくれた。

「試験を受けに来た人かい？ここにいるってことは落ちちゃったのかい。まあ気を落とさずに頑張んな！」

訂正する間もないくらいの早口で言うと、おばさんは野菜の一つをオレにくれて去って行った。

…風のような人ってああいふ人のことなのかもしれない。

貰った野菜？を一口かじってみる。見た目はピーマンぽいけど中身はしっかり詰まっていた。

シャキツとしてて、みずみずしくておいしい。

生でも食べられるものだよ。

「ビィ。食べるか？」

「グ」

早くくればかりの返事に笑いつつ、ビィを腕に抱き直す。さすがに肩の上で食べるのは危ないからやめてほしい。

ぶらぶらと歩き、ちらほら見える民家を横目にしながら進むと、大きな船が見えてきた。

「おおーっ！船！」

回りで慌ただしく出港準備をしている人達。

申し訳ないけど、その中の一人を捕まえて訴えてみる。

「あの！『サロク・ロクフ』へ行きたいので船に乗せてください！」

交渉なんてどうやったらいいのかわからなかったので、直球で言うてみた。

「5千ソルだ！」

怒鳴り返された。ので、オレも大声で言うてみる。

「お金は持ってません！」

……呆れた視線で見られてしまった。
だって持ってないものはないのだ。

「…おい。いくらなんでもそりゃ無理だろ」

「…ですよー」

笑ってごまかしたが…

困ったな

お互いにどうしたらいいのかわからず、気まずい雰囲気になったら、ごっつい体格のおじさんがやってきて笑って言った。

「いいぜっラッキービッグがいるんなら船旅も楽になるだろうしな」

おお。本当にラッキービッグは幸運を呼ぶんだな。

「本当ですか？ありがとうございます！」

「おう！魔物が出たら頼むぜ坊主！！」

と、背中を力いっぱい叩かれた。痛い。
ていうか…

（…魔物？出んの？）

いやいや。それは無理っしょ。

遭遇？ミルミルと海の精霊石へ3

積み荷を運び終えた船は、ようやく『サロク・ロクフ』へ向けて出港した。

そんな中オレはというと…

「おい！坊主！これに向こうへ持ってけ！」

「あれ取って来いっ！」

「今度はこっちだ！」

…こき使われ中です。

船に乗ったのはお昼前で、日が暮れるまでの約半日ずっと走りっぱなしだった。

タダ乗りだからしょうがないけどさ、明日は筋肉痛間違いなしだな。

「おつかれさん」

薄暗い中、他の乗組員たちと夕食を食べていると、オレを船に乗せてくれた人（船長さんだった）が声をかけてきた。

「今日は頑張ったみたいだな。明日もよろしく頼むぜ」

笑いながらの言葉の中に、からかいが交じっているような気がする…。

…もしかして、今日のってそんなに頑張らなくても良かった？

船長が去ると入れ代わりに、人懐こそうな男の人が近づいてきた。簡易的だけど鎧を身につけ帯剣している。年齢は20前後に見える。冒険者かな？

「よ。お前、アレだろ？ユイ様のお気に入り」

ユイ？…あ、深沢のことか。

「別にお気に入りに入りつてわけじゃ…」

そうか。回りからはそんなふうに見られてたのか。だから睨まれたのかな？

「ふーん？あ、俺はリノ。勇者様がどんなんか見たくてあの島に行ったんだ。」

お前は？試験に参加してたっばいけど」

勇者観光？

…どう突っ込めばいいのか…

「オレはゼン。参加っていうか…楽しそうだったからまぜてもらったんだ」

そう言ったら笑われた。勇者観光のほうがよくばどおかしいと思うが。

「それにしても、今日のお前、頑張りすぎだぜ？」

リノから言われて、やっぱりと思う。どうも乗組員たちが面白がっ

て仕事をさせてたらしい。リノはそれを見ながら笑ってたらしいが。

「教えてくれてもよかったのに…」

そう言つて情けなくテーブルに突つ伏すと、リノは笑いながら謝つてくれた。

「悪い悪い。」

ほら機嫌直せつて。甲板でゲームやってるから俺らも混ざろつぜ」

リノがそう言うので甲板まで行くと、乗組員や乗客が一緒くたになつて何やらやっていた。

近づいて、リノにやろつぜと言われたけど、ルールも知らないし、それにどうやらお金をかけているようだ。お金なんて持つてゐるはずない。

それを伝えたら、リノが気前よくお金を貸してくれた。…初対面の人にお金貸すなんて何考えてるんだらう？

ルールは、三枚のコインをカップに入れてテーブルにひっくり返すだけ。コインの表が何枚上を向いているか当てる簡単なゲームだ。

要は運試しゲームなのだが…

ラッキービッグ効果なのか、オレは全勝してかなりの金額を儲けてしまった。

（おゝオレつてば金持ち。人のお金だけど）

おかげでこちらのお金について知ることが出来た。

・白貨

・金貨（50枚で白貨）

- ・銀貨（20枚で金貨）
- ・銅貨（10枚で銀貨）
- ・半銅貨（5枚で銅貨）
- （白貨：500万ソル）
- （金貨：10万ソル）
- （銀貨：5000ソル）
- （銅貨：500ソル）
- （半銅貨：100ソル）

…と、まあこんなかんじ。

白貨より上の硬貨もあるらしいのだが、一般には出回らないらしい。

「はい。お金返すね。ありがとう。すげー楽しかった！」

借りた分だけじゃなく、儲けた分すべて返したのでリノは驚いていた。

だって元々オレのお金じゃないし。ないはずのもので稼いでもな。

リノは呆れてたけど。

「じゃあお休み〜」

眠りこけてたビィを抱いて、船室に入る。

っていつてもまだ夜になったばかりだから眠くはないんだけど。

明かりは節約のためにあまりつけないらしく、船室の中は薄暗い。作り付けの窓から差し込む月明かりを頼りに進む。

窓から外を覗き込むと、暗いはずの海に星のような光りが煌めいて見えた。

青みがかった緑の光り。その光りが、それこそ星のようにたくさん

輝いている。

「うわ。すげー」

ビィや他の人たちを起こさないように声をひそめて呟く。

ここがオレの住む世界なんだな。
と、感動と共に、改めて思った。

遭遇？ミルミルと海の精霊石へ4

次の日。

昨日のことが嘘のようにゆったりとした時間が過ぎていた。幸いにも筋肉痛には襲われなかった。

メイドさんたちに貰った服の効果かもしれない。

ぼーっとしていたら、料理を作るのを手伝ってくれと言われたので食堂へ行く。

「おう。坊主、これをテキトーに切って鍋ん中に入れてくれ」

そう言われて見ると、芋が山積みになっていた。

(…え？これ全部？)

皮は剥かなくていいらしいので、そのまま一口大に切っていく。

切りながら世間話として昨日の一人勝ちの話などをしていたが、ネタがきれて黙ったままもくもくと芋を切っていく。

(…飽きてきた)

何か話題はないだろうか？話していれば気も紛れる。

(…向こうの世界の話なんてしても通じないだろうしな)

何かないだろうか？と思って鍋を何気なく見たら、どーも見覚えのある料理が出来上がろうとしていた。

（あれって昨日食べた料理っばいけど…？）

まだ仕上がってはないので、もしかしたら途中までの過程は同じで、これから別の物になるのかもしれない。…でも気になる。

「あの、それって昨日のと同じメニューですか？」

「おう。昨日どころか、『サロク・ロクフ』に着くまでの一週間、ずっと同じメニューだぜ！」

オレがそう聞くのをわかってたみたいに笑いながら答えられた。

ずっと同じ？一週間も？

味はおいしいんだけど…

飽きそうだな～

料理人のおじさんに聞くと、船に積める物は限られるため、どうしてもそうなってしまいうらしい。

「うう…せめて釣りができれば魚が取れるのに」

と言ったオレの言葉を聞いた料理人のおじさんは、だったら取って来たら夕食に出せるからよろしく頼むと言ってきた。

おじさん、取れると思ってないな？

と、いうことで、昼食をとった後、リノと二人で釣り糸を垂らす。

「あのさー、ゼン。動いてる船からやって釣れるのか？」

釣竿の道具はリノに作ってもらった。ギルドに登録していたらしく、あのなんでも入るやつを持っていた。お兄さんのはベルトの小物入れだったけど、リノのは細長い板だった。あれがギルドカードになるらしい。

竿っぱいのと糸と針で手作り釣竿の出来上がりだ。

「どうかな？ 気合いでなんとかならないかな？」

こちらの世界では釣りはあまりやらないらしい。

釣れるまでのんびり待てないんだそうだ。

リノが釣竿を持っていたのは、漁師の息子で興味があったからとりあえず道具だけ手に入れてみただけらしい。

「気合いねー。この船、結構早いよ？」

そうなんだよね。この船やたら早いのだ。

動力は何なのだろうか？

「気分だよ気分」

どうせやることがないんだから、ゆっくり釣り気分を味わっておこう。

…と思っていたら、船が大きく揺れた。

「うわっ?！」

「っ！ゼン！中に入ってる!!！」

そう言うや、リノは船の前方へ走っていった。

（まさか、魔物？）

リノの表情は険しかった。何かがあつたのかもしれない。

もちろんオレに出来ることがあるとも思えなかったので、ビィを腕に抱いて忠告通りに船室へ向かう。

直後、空気を切る音が聞こえたので、感にしたがつて立ち止まる。

ダンッッ！！！

と、いう大きな音と共に巨大なタコの足が目の前にたたきつけられた。

（でっかいタコ！？）

やっぱり魔物か！

ど、どうしよう。

通路はタコによって塞がれている。ここを通らないと船室へ行けないのに…。

どうしようと思ひながら巨大なタコ足を見ていたら違和感に気づいた。

（タコ足に鱗がある！）

え？タコって鱗あつたっけ？とどうでもいいことに気を取られる。

目の前のタコ足が動かないのをいいことに、オレは触ってみることにした。

（おおゝスベスベだ。ぬめってない。鱗キレー）

我ながら危機感に乏しいと思うが、このタコ足が危険だとは思えないのだ。

（攻撃するつもりじゃない気がする。…んー、何かを訴えたがってる感じ）

根拠はないが、そんな気がする。

「グゝ」

そんなことを考えていたら、いつの間にかビィがタコ足の上にいた。

「お、ビィはチャレンジャーだな！」

ビィはオレを見た後、タコ足を本体のほうへ登っていく。そして時々振り返る。

「ついて来いつてことか？」

「グウ」

まあ、タコ足は大人しくしてるし、でかいから海に落ちるってこともないかも？

ということでタコ足によじ登ってみる。鱗が滑り止めになって、思

つていたより歩きやすい。

それでも落ちないように気をつけながらビィを追いかける。

本体のほうに近づくにつれて、乗組員や腕に覚えのある乗客たちがタコ足の持ち主を追ひ払おうと奮闘しているのが見えた。

オレから見えるってことは、当然向こうからも見えるってことで…

「何やってんだっゼン！早く降りてこい！」

リノに怒られた。

登ったのはビィが先なのに…

「ビィ。リノが怒ってるよ。戻るぞー」

ビィはタコ足の根本らへんに座ってオレを待っていた。

タコ足の持ち主はそれがわかっていているのか、他の足は動かしているのに、そこだけは動かそうとしない。

「何かあるのか？」

結局オレも根本まで行く。ビィを抱き上げようと膝を付いたら、ビィのいる場所の鱗と鱗の間に黒っぽい何かが突き刺さっているのに気づいた。

「なんだ？コレ」

それを抜いた途端、オレとビィはタコ足によって投げ出された。

「うわっ！ビィ！」

空中でビィを掴んで抱き込む。そのまま甲板にたたき付けられるの

かと思っていたら、誰かが魔法で衝撃を和らげてくれたので、それ程痛い思いをしなくて済んだ。
誰か知らないけどありがとう！。

タコ足の持ち主は用は済んだとばかりに去ってくれたらしく、その後オレは全員に叱られるハメになった。

えー

オレばかり叱られるってなんか納得いかない…

遭遇？ミルミルと海の精霊石へ5

翌日。

結局叱られるだけ叱られたオレに残されたのは、あのタコ足に突き刺さっていた黒い物だけだった。

タコ？の魔物はミルミルという名前らしい。可愛いじゃないか。

普段は大人しいが、たまに襲ってくることもあるため、油断は出来ない相手らしいが…昨日のやつは、その黒いものを取ってほしかっただけらしい。

「で、これ何なの？」

釣竿は壊れてしまったので、リノのギルドカードに入っていた網を海に投げ込んで釣りごっこを楽しんでいる。

「海の精霊石だな。全体の色は黒だけど…中に緑が見えるだろ？」

言われて見ると、中心部に青っぽい緑色が透けて見える。

夜に見た海の星空の色だ。

「海の精霊石は周囲の海に加護を与えるとされている。それがあれば船の安全も上がるって話だ。

ま、多少はってことだけだな」

売れば金になる、と言われたが…いいのかな？

「つーか、お前も手伝えよ、ゼン。お前が網でやろーって言い出したんだぞ？」

見ると、リノが一人で網をあげようとしていた。
精霊石を見ていて気づかなかった。

「あ、ごめん。」

…重かったんだな、この網」

海に落としたときには重いとは思わなかったのに。

「こんなに重いのはおかしいって。何か引っかけたんじゃないのか？」

リノと二人、唸りながら網をあげていたら、見兼ねた乗組員の人達
があげるのを手伝ってくれた。ありがとうございます。

そしてあげられた網を見て全員絶句。

網の中には魚はもちろん、貝やらなんやらわからないものが沢山か
かっていた。

…重いはずだ。

「…さすがラッキービッグと海の精霊石だぜ…」

引き彎った表情でリノが言い、回りの人達がそれに頷いた。

（え？そうなの？）

ビィを見ると器用に肩の上で眠っていた。
…いつの間に寝たんだ。

とりあえず、仕分けてみることにした。

魚や貝などの食べられそうなものは食堂に運ばれた。今夜の夕食は豪勢なものになるだろう。

他には、珊瑚？のようなものがあり、薬の素材になるらしいので、欲しい人に分けて、残りは後で売ることにする。

その他にも素材になるものがあつたらしいのでそれも纏めておく。

残ったのは装飾品の数々。

海の中にあつたので錆びたりしているものもあつたが、売れるレベルだということでこれも売ることにする。

「ナイフかな？」

装飾品の中に短刀のようなものがあつたので手に取ってみる。錆びてるらしく鞘から抜けない。

「研ぎに出してみな。キレイにしてくれるぜ」

そう言われたので、それだけは別にしておく。

ナイフは何かと使えそうだな。

「いきなり大金持ちになつたな」

楽しそうにリノが言ってくる。

んゝ…嬉しいといえば嬉しいんだけど…

あんまりツキすぎても怖いな…

ビイはともかく、海の精霊石のほうは早めに手放そう。

「大漁だね」

言われて見ると、優しそうな外見の男の人がのんびりと歩いてきていた。

昨日オレが甲板にたたき付けられそうになったとき、魔法で助けてくれた人だ。若く見えるけど、けっこう年上らしい。

「やっぱり君は精霊に好かれているね」

「そうなんですか？」

「君がゲームに一人勝ちした夜も精霊たちがコインをいじっていたしね」

「…そうなんですか？」

聞くと、あの夜、オレの答えに合わせるように、精霊たちがコインをひっくり返していたらしい。

負けた人たちはそれに気づかずにはムキになった結果、散財するはめになったようだ。

ズル勝ちしたってことか？

「そういえば、船長がその精霊石を欲しがっていたけど、ゆずってくれないかな？」

お。ちょうどいい。

「はい。どうぞ」

即座に出したオレに、リノは呆れた視線を送ってくる。

「…言ってみただけだったんだけど…まさか本当にもらえるとは思わなかったな」

こっちもか。

「別にいいですよ？元々オレのじゃないですし」

船に乗せてもらったし、助けてもらったし。

結局その日は夕方早いうちから豪勢な食事とお酒が出され、上機嫌な船長はかなり酔っ払っていた。

そして、ビィはあちこちから餌付けされて腹がやたらふくれていた。

で、結局、今日の収穫はいくらくらいになるんだろうか？

遭遇？ミルミルと海の精霊石へ6

「ゼン、もうすぐ着くぞ。『サロク・ロクフ』国、『シャイド』の街だ」

後半の船旅は特に何事もなく、迎えた最終日。

昼前に『シャイド』の港に入港し、やっと『サロク・ロクフ』国へたどり着いた。

緩やかな坂の上に建つ、半円状になった街だ。そのすぐ向こうは森になっていて、街道は左右、海に沿って伸びている。

「着いたー！」

「グー」

船はあまり揺れなかったけれど、気分的に陸に足をつけると安心感がある。

ビーだってきつとそう言ってる。

「はいはい。のんびり気分に戻る前にギルドに行くぞー」

リノに頭を小突かれてよろめく。

例の戦利品は大漁すぎて一人では持ち運べないので、先にギルド登録してギルドカードを貰うことにしたのだ。

もちろん戦利品はリノと折半予定だ。

「ギルドカードのこの部分、ここが信頼度を示してる。白、赤、黒、

青、緑の順に信頼度が上がっていく。：まあこころへんはギルド側がわかってればいいから、無理に覚えなくていいぞ」

リノと同じギルドに登録することにしたため、ギルドカードについての説明をリノからしてもらった。

ちなみにギルドへの登録はすぐに済んだ。

港のすぐ近くにあったというのもあるが、申請書などは何もなくて、ただギルドカードを貰うだけだったのだ。

受付のお姉さんとドキドキハッピーングなどもなく、あっさりと登録は済んだ。

「うちのギルドは登録してから一年間は見習い期間になる。報酬の何割かはギルドに取られるから注意するように。：ていつてもゼンには今回の大金が入る予定だからな。あんまり気にせず好きな依頼を受けていけばいい」

他わからないことや、依頼の受け方等は明日教えてくれると言う。

「わかった」

ということとで戦利品を折半する。

リノはギルド登録祝いだと言って殆どをオレのギルドカードに入れていたが。

「別にギルドじゃなくても買い取ってくれる場所はあるぞ。全部は売らずに小分けにバラ売りしたほうがトラブル防止になる」

なるほど。勉強になる。

お兄さんも治安が悪いつて言ってたし。刺激するようなことは、し

ないほうがいいってことだな。

「じゃあな。明日はギルドで待ってる。あんまり早くなくてもいいからな？」

宿を取るなら『菊花亭』がオススメだ。メシが上手いぞー」

明日はギルドで待ち合わせる約束をしてリノは去っていく。
実家がこの街にあるらしい。

オレも船長さんや乗組員のみんなに挨拶してリノに勧められた宿屋
に行ってみよう。

どんな食事が出るのかな？

この世界の食べ物ほ当たり前だけど食べたことないものばかりなの
でとても楽しみだ。

念願のギルドにも登録できたし。

食べ歩きツアーとかもやってみたいな

あ、その前に換金しないとだな。

宿屋っていくらくらいなんだろう？

「グーウ」

「お。腹へったか？んじゃ早く換金して宿屋に行くか！」

「グッグー」

そんなこんなで『サロク・ロクフ』でのオレとビィの生活が始まった。

よしっ！

明日から仕事がんばろう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8579n/>

選ぶ世界のその先に

2011年2月9日09時09分発行